

内海成治初代会長を偲んで - 緊急人道支援に託された未来への可能性 -

緊急人道支援学会 事務局長／近畿大学教授 桑名恵

緊急人道支援学会設立のきっかけ

緊急人道支援学会の設立日からわずか4日後の2023年9月16日、内海成治初代会長は急逝された。9月12日に近畿大学で開かれた創設記念集会では、内海先生が多くの参加者を前に、愛嬌深く、ユーモアを交えながら、初代会長として新学会設立への熱い思いを語り、意気揚々とされる姿を目の当たりにしていただだけに、設立に関わった関係者皆にとってあまりにも突然のことだった。

そもそも緊急人道支援学会設立の構想は、内海初代会長の発案がなければ生まれなかった。きっかけは、コロナ禍の2022年10月末に京都で開かれた『緊急人道支援の世紀：紛争・災害・危機への新たな対応』（2022）の出版を祝う、編著者3名（内海先生の他に、大西健丞氏、筆者）の会食であった。脱稿後にも立て続けに起こっていたコロナウイルス感染症の世界的流行や、トルコ・シリア地震、ウクライナ侵攻などの深刻な人道危機に接し、内海先生から、本で書いて終わりというのではなく、常に人道支援に関わる知恵や実践のアップデートをしていく場を設けることが必要なのではないかと問題提起されたことにある。様々な危機が連動し複雑化している今日、人道支援のパラダイムが変わりつつあることは本の中でも強調されていた点だ。また、高い確率で起こると予測されている日本国内の大規模災害を念頭に置いた場合、現在の日本の人道支援の体制では立ち行かないという強い懸念を持っていた大西氏もすぐに賛同した。私自身は、組織の立ち上げや持続的に運営することの労苦に対する心配が頭をよぎりながらも、本に書くだけでは変えられない現実があり、学会設立への好機がそう何度も巡ってくるわけではないと考え、サポートすることに同意した。こうして、セクターの垣根を超えて、知恵を総動員し、人道危機への新たな仕組みや支援環境を創出するという大きな目的を掲げ、学会の設立を目指す動きが始まったのであった。

国際教育協力への貢献

内海先生は、1981年以降、国際協力事業団（現・国際協力機構：JICA）の国際協力専門家としてマレーシアに派遣されて以来、40年以上の長きにわたり、国際教育協力の実践・研究に関わって来られた。1996年4月には、大阪大学人間科学研究科ボランティア人間科学講座教授に着任し、文部省学術国際局国際企画課国際協力調査官を併任しながら、国際協力分野における教育協力やボランティア研究を推進された。特にボランティア研究という分野は新しい研究分野であったこともあり、「国際ボランティア学会」の設立（1999年）にも尽力された。他にも「アフリカ教育学会」の前身となる「アフリカ教育研究フォーラム」の創設者であったことを考えると、内海先生にとって、新しい領域に学会を立ち上げるという発想は、私が思っているほど特別なことではなかったのかもしれない。

内海先生は、大阪大学に在任中、2002年11月から1年間、教育大臣のアドバイザー（JICA専門家）としてアフガニスタンに赴任された。アメリカ同時多発テロを受けてタリバン政権が崩壊し、新たな政権が樹立されたばかりの教育復興の初期段階で、教育省及び高等教育省のキャパシティビルディングや女子教育支援などに関わる政策立案と実施に貢献された。私は当時大阪大学人間科学研究科の博士後期課程の学生であり、内海先生の赴任より少し前から保健分野で活動するNGOの駐在代表としてアフガニスタンに赴任していた。内海先生がアフガニスタンに来られてからは、当時カブールに赴任されていた様々な機関・組織の日本人の協力を得て、大阪大学に「遠隔教育」と題して衛星回線を使っのゲスト講義の提供を手伝い、週末に夕食を共にするなど、現地で親交を深める機会が多かった。

内海先生はこれらのアフガニスタンでの現場経験から、日本の国際協力にこれまでにはない大きな変化が起こったことを指摘した。第一に、紛争の予防や平和構築など、新しい領域が国際協力の重要分野になったこと。第二に、開発支援のみならず緊急支援、復興支援をも視野に入れる取り組みが求められるようになったという、時間的広がりが生じていること。第三には、パレスチナやアフガニスタンなど現在も紛争が続いている新しい地域や国が支援の対象となったという地理的な拡大である。専門知がない分野で、「まったく違う考え方、支援方法」の検討が求められ、「研究手法の変革と同時に、学問分野や手法の拡大」の変更が迫られていると問題提起している（内海2017:148-149）。教育や保健など

セクター別の実践や研究は進められていても、緊急人道支援という横串を刺して包括的に、学問的に検討する場の必要性をその時点で早々に感じていらっしやったのかもしれない。

アフガニスタンから帰国されて以降は、新しい国際協力の動向をより深く分析するため、紛争や災害後の緊急人道支援や復興支援のあり方に関する調査を、ウガンダ、南スーダン、東ティモール、アフガニスタンなどで、精力的に進められた。中でも、紛争後の複数地域での研究調査を通して提唱した、教育における「難民化効果」研究は示唆深い。難民になるということは多くのことを失うことになるが、これらの研究から、「どういう状況でも失われないもの、知識・技能や資格などに対するニーズ」、すなわち教育熱が高まる傾向があること、そして教育を求めて難民になり自分の人生を切り開こうとする傾向を数々のフィールドワークを通して解明した（内海、2007）。

内海先生の国際協力分野の貢献でもう一つ特筆すべきことは、ご自身の学術調査において、院生、学生と共に調査を行うなど、若い世代の育成を常に意識されていたことである。私は現場のNGOの担当として、東ティモールやアフガニスタンで学生を伴っての調査に同行することがあったが、学生では滅多に触れることのできない面会先、フィールド調査の場を提供していた。同行した学生の研究成果は、『はじめの国際協力—変わる世界にどう向き合うか』（2012）という一冊の本としてもまとめられているほどである。今では、外務省、JICA、NGO、大学教員など国内外の国際協力分野での卒業生を輩出し、そのうちの何名かには本学会の立ち上げや運営の大きな力となっていた。また、国際ボランティア学会の実践賞（村井吉敬賞）の創設への働きかけ、国際開発学会の賞選考委員長としての尽力など、若手の研究者への道を開くための学会賞の充実に注力されてきた内海先生の姿もそばで見えてきた。

緊急人道支援に見出した未来への可能性

長年国際教育協力に関わって来られた内海先生は、緊急人道支援をどのように捉えていたのだろうか。『緊急人道支援の世紀』（2022:5-6）の中で、内海先生は、受ける人々に寄り添うこと（レシピエント・ドリブン）の支援の重要性を強調し、緊急人道支援を「人間の尊厳の表現」として。特に教育支援に携わられてきた立場から、尊厳が最も損なわれる可能性の高い子どもや人々（特に女性）の声に素直に耳を傾けることから始めるべ

きであると説いた。支援は、内戦や被災の影響を受け、尊厳が損なわれた人々と私たちが「共に生きる世界を形成するための働きかけ」であるとし、人道主義に通底する考えが伺える。私の脳裏に焼き付いている、カメラを片手に、いつもにこやかに、子どもや母親に気さくに話しかけられていた内海先生の姿とも合致する。

さらに、人間社会は、「社会や自然からの大きな力によって危機に直面することは避けられない」状況にあるものの、「自分がどうにもできない危機の現実の中で、そこで悲しいものではなく、その原因や対処を必死で考えること、そして思い続けることで、その悲しみを克服できるということなのではないだろうか。」(2022:5-6) との考えを示し、ここに緊急人道支援が持つ可能性の原点を見出している。また、フィールドワークの集大成としてまとめられた別の著書『ボランティア・難民・NGO：共生社会を目指して』では、危機を打開し、共生社会を実現する手がかりは、少数の偉大な人格によってではなく、「無数の人格が蟻のように働くことで作り出される」(内海、2019: 332)と主張している。さまざまなセクター、組織、市民社会が集結・協働できるような緊急人道支援、国際協力を拡大・発展させていくことに託した未来への希望を読み取ることができる。

おわりに

このように、内海先生が緊急人道支援学会の設立を目指された強い思いには、教育支援のみならず、共に生きる社会をつくる大きなアクターとしての国際協力、緊急人道支援、そして一人一人の姿勢のあり方にまで至る新たな方向性の模索があったのではないかと思う。内海先生が強いイニシアティブで生み出してくださった緊急人道支援学会を、これからも継続し変容するであろう人間社会の危機において、人間の尊厳を何よりも重要視できる人道支援の実現を模索し、探究する場として機能できるように推進していかなくてはならない。2025年2月の第二回緊急人道支援学会大会では、緊急人道支援学会賞(内海成治賞)の創設も決定した。表彰の機会が、内海初代会長が設立時に抱いていた緊急人道支援に対する思いを継続的に再確認できる場になればと願う。

引用文献

内海成治編著(2012)『はじめての国際協力—変わる世界にどう向き合うか』昭和堂。内海成治(2017)『学びの発見：国際協力論考』ナカニシヤ出版。内海成治(2019)『ボランティア・難民・NGO：共生社会を目指して』ナカニシヤ出版。内海成治・桑名恵・大西健丞編著(2022)『緊急人道支援の世紀』ナカニシヤ出版。